私のプチ&プライベート東欧現代史

海外交流

岡　本　真　理*

My petit & private history of modern Eastern Europe

Key Words：Eastern Europe, Hungary

ハンガリー語専攻は本学外国語学部の中でも一番歴史の浅い専攻であるが、それでも1993年の発足以来、気がつけばもう30年になろうとしている。本専攻やハンガリー語については、私の先輩である早稲田みか先生がすでにこの『生産と技術』第65巻第2号（2013年）で簡潔かつ網羅的に紹介されているので、ぜひ一読されたい。そして、今回執筆を依頼された私は、そんなわけでもう書くことがないのでどうしようかと困ってしまい、この機会に私の至極個人的なハンガリーとの関わりを振り返り、「プチ東欧現代史」を綴ろうかと思い立った（念のため断っておくが、「私自身が現代史である」と豪語できるほどの高齢ではない）。

（1）体制転換以前のハンガリー（1986年）

東欧は1989年社会主義から資本主義へ体制転換し、90年代にはソ連の崩壊、ユーゴ内戦、そしてミレニアムを経てNATO・EUへの加盟と目まぐるしい変化を遂げた。

私が初めてハンガリーを訪れたのは1986年。大学3年生になった私は、父の在外研究に便乗して留学ならず「遊学」することにした。そして初めての海外に飛び出した先がハンガリーだった。当時はまだ社会主義で、独特なことも多かった。電話のある家は稀で、日本に電話をするにも中央電報電話局まで出かけ、順番を呼ばれるまで暗いロビーで3時間くらい待たされた。町を走る車は東独製のトラバントやルーマニア製のダキアばかり、すさまじい排気ガスで歴史的な町並みは真っ黒だった。中心街では100メートル歩くと男が2，3人は寄ってきて「ドラール？」とヤミ両替を迫るので、「ノー」「ノー」と振り払いながら進む。しかしそれ以上に楽しいことが多かった。東欧でも農業国で比較的経済が安定していたハンガリーは、食料も豊かで何を食べてもおいしかった。ハンガリー人は人懐こく、すぐに何人かの大学生と友達になり、いろんな所に連れて行ってもらった。遊びに行く予定を前日にやむなくドタキャンする時は、電話がないので家まで行って「明日来れない」と伝え、そのついでに長時間おしゃべりしたりした。

父の研究所についていくだけの生活にすぐ飽きてしまった私は、研究所の秘書に紹介されて、町の語学学校に通いハンガリー語を勉強することにした。ハンガリー人の女性の先生の初級クラス。生徒はソ連の男性2名、ユーゴ人男性、ルーマニア人女性そして私の5人だった。ロシア人の1人は数学者で、モスクワの大学でハンガリー人女性と知り合い、移住してきたそうだ。もう1人は自称指揮者で、休憩時間にはいつも先生の隣に座って彼女の手を握り、ロシア語で口説いていたのだが、先生はいつもハンガリー製のシンフォニアという煙草をふかしながら慣れた様子であしらっていた。いつもニコニコ笑顔のユーゴのおじさんはユーゴスラヴィア大使館に勤務していて、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの美しい古都モスタールの出身だった。ルーマニア人の女性は輝く金髪に派手な化粧、抜群のプロポーションで、休憩時間はいつも先生と煙草をふかしていたのだが、聞くとサーカスでアクロバットをしていて、同じサーカスでトレーラーの運転手だったハンガリー人と

* Mari OKAMOTO
1965年8月生まれ
一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学
現在、大阪大学人文学研究科　教授
TEL：072-730-5343
E-mail：okamari.hmt@osaka-u.ac.jp

結婚したばかりだそうだ。彼女の話すハンガリー語は動詞がすべて命令形で、例えば「夫が台所に来てパンを食べた」という文であれば、「ウチのダンナ、台所おいで、パン食いな」という感じだった。たぶん彼女の周囲の人がみな命令形で話すうちにこうなったんだろうと思う。しばらくすると、彼女は妊娠してつわりがひどいと言って、毎日紙袋いっぱいのチェリーを持ってきて、授業中に食べるようになった。そして私たちもよく勧められて、一緒にチェリーを食べた。

夏になると、東部の町デブレツェンのサマースクールに参加した。ここには毎年世界中から約400名が集まり、ハンガリー語を勉強するのだ。西欧諸国からは移民2世や3世が、国境周辺諸国からはハンガリー系の若者が多かった。ルームメイトはポーランド人で、秋には彼女を訪ねてワルシャワへ行った。セルビア・クロアチア・スロヴェニアから来た女の子たちともそれぞれ友達になり、冬にはユーゴスラビアを旅して順に彼女たちと再会した。古い橋が美しいモスタールにも行った。セルビアのサニャとはそれ以来、今もまだ家族ぐるみの交流が続いている。

（2）体制転換の直後（1990～92年）

ハンガリー語の面白さにすっかりハマって猛勉強した私は、大学卒業後、大学院に進学した。当時日本にハンガリー語専攻はなかったので英語英文学専攻の修士課程だったが、「英語とハンガリー語の対象研究をやる」という名目でハンガリー政府奨学金に応募し、2年間留学することになった。留学の内定を得た1989年秋ごろから、東欧でドミノのように社会主義政権が崩壊し始めた。ハンガリーが国境を開いて東独の人々をオーストリアに逃がした「ヨーロッパ・ピクニック計画」、ベルリンの壁崩壊、ルーマニア民主革命と独裁者チャウチェスクの処刑…。まだ日本にいて留学準備をしていた私は、毎日夢中になって新聞記事を切り抜き、スクラップブックに貼り付けた。

ハンガリーに到着した1990年4月には、体制転換後はじめての自由選挙が行われた。一党独裁体制に代わって、雨後の竹の子のように60を超える政党のポスターが町中に貼りだされ、テレビでもにぎやかな選挙CMが流れていた。6月になるとソ連軍の撤退が完了し、この日は大通りを歩行者天国にして、大規模な記念イベントが開かれた。西側資本が瞬く間に進出し、マクドナルドやピザハットは興味津々の市民でごった返した。日本企業もさっそく動き出し、いの一番にスズキ自動車がエステルゴムに工場を作り、ヨーロッパ向けの自家用車製造に乗り出した。

ハンガリー語がかなり話せるようになった私は、大学に通いながらいろんな通訳アルバイトの機会を得た。日本の商社や大手メーカーには役員の視察だなんだと来客が多く、同行してハンガリーのことをいろいろ話すと喜ばれた。日本料理店もいくつか進出してきた。ハンガリー人スタッフとの間でトラブルが発生すると、即座に電話がかかってきて、私が電話の向こうから割って入って双方の言い分を通訳した（後日お礼に貴重な日本食を堪能させてもらった）。一番大きな仕事は、国際交流基金が旧社会主義国ではじめてハンガリーに事務所を立ち上げることになり、その手伝いをしたことだった。私は日本から来たばかりの所長の右腕ならず「両腕」となって働いた。オフィスにはまだデスクも椅子もなく、1本引いた電話が床に置いてあるだけの状態だった。私たちは家具職人と相談して、特注の大型書庫を作ってもらった。まだ日本のような良質のオフィス用品がなかったので、ウィーンに出張してファイル類を大量に買い込んだ。ヴォルヴォの大型車も発注した。ニュースレターを刊行し、映画鑑賞会など文化イベントのアイデアを次々に考案し、多くのハンガリー人に喜んでもらった。縁遠い国だった日本の新しい情報に触れるハンガリー人の、純粋な関心の高さを肌で感じることができた。

（3）ミレニアム、子どもたちと（1999年～2000年）

私はこれまで3度ハンガリーに長期滞在したが、その3度目はミレニアムの時だった。すでに私は大阪外国語大学の助手としてハンガリー語を教えていたが、学科の理解を得て1年間のサバティカルに出かけた。町は少しずつ変化していた。かつて排気ガスで真っ黒だった大聖堂が真っ白になっていたのには、ぎょっとした。体制転換後、近隣諸国に住む300万を超えるハンガリー系住民も自由にハンガリーと行き来するようになっていた。それは社会言語学の分野でも大きな進展をもたらし、国境内外

のハンガリー人研究者らが活発に共同プロジェクトを行うようになっていた。私は言語学研究所で、母語と国家語のバイリンガル状況や言語意識の変化について調査をした。

この間にユーゴスラビアは崩壊し、セルビアとクロアチア、次にボスニア・ヘルツェゴビナが激しい内戦となった。モスタールの古い橋は完全に破壊された。美しい町だろう？とニコニコ笑っていた大使館の彼はどうしているだろうか。そういえば、あの当時はまだ自分がクロアチア人かセルビア人か、などという話は話題にも上らなかった。サニャのお母さんに会いにセルビアに行った。サニャ自身は留学先から戦争中の祖国には戻らず、ニュージーランドに移住していた。その後、ユーゴ内戦への徴兵を逃れるためにハンガリーに避難してきたサニャの従兄弟にブダペストで再会した。彼の話では、セルビアではハンガリー系住民の方が先に徴兵されて、対クロアチア人の前線に送り込まれるそうだ。

今回は保育園年長のふたごの息子たちを連れていたので、その分今までにない苦労があった。社会主義時代のままのアパートの壁は薄く、床を歩く足音は下階にまる聞こえだった。息子たちが飛び跳ね、騒ぎ、喧嘩をするので、そのたびに下階の一人暮らしのおばあさんが棒で天井をコンコンと叩き、会えば苦情を言われる。私はついに耐えかね、戸建ての家を探して引っ越した。しかし今度は欲深い大家が、契約書に入っているガレージを私が使用していないのを知ると勝手に又貸しして収益を得ていることが発覚し、大げんかをして家賃を値引きさせた。市場経済の競争激化でハンガリー社会が余裕なく、金に汚なくなってきたように感じることが多くなっていた。しかし、幼稚園の先生たちは優しく、子どもたちはのびのびと成長した。路線バスの運転手さんは、通園する子どもたちを見つけると必ずクラクションを鳴らし、運転席から手を振ってくれた。私たち親子もまた、元気よく手を振り返すのが日々のささやかな楽しみとなっていた。時代が変わっても、ハンガリー人の人懐こさは健在だったのだ。